

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：33921

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780368

研究課題名(和文) 情報接触における意識と無意識の総合的検討

研究課題名(英文) Multilevel framework of conscious and unconscious processing

研究代表者

川上 直秋 (Kawakami, Naoaki)

愛知淑徳大学・人間情報学部・特別研究員

研究者番号：80633289

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、意識と無意識という人間の持つ二つの処理システムがいかなる形で我々の社会的認知に影響を及ぼしているか、総合的に検討することを全体の目的とした。結果、意識と無意識は本質的に独立したシステムであること、またそれぞれ優先的に処理を行いやすい情報があることを明らかとした。すなわち、ある情報接触によって発動する心的過程は、その情報の種類や状況に応じて、適応的に使い分けられていることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is that how conscious and unconscious systems affect our social cognition. Results indicated as follows: Conscious and unconscious processes are essentially independent. Moreover, both processes are uniquely sensitive to different types of information sources. These results suggest that the mental process which is triggered by certain information seems to serve different functions, supporting our highly sophisticated social lives.

研究分野：社会心理学

キーワード：意識 無意識 閾下 潜在指標

1. 研究開始当初の背景

現代は“情報過多社会”とも呼ばれる通り、当人の意思とは無関係に、常に何らかの情報・刺激に曝されている。例えば、通勤や通学の際だけでも、街頭の看板、電車内での中吊り広告など、限らない情報で溢れている。この傾向は、インターネット(以降、ネットと略記)の普及により急速に加速しつつあり、もはや時間や場所を問わず、常に多くの情報へとアクセスが可能となった。ところが、匿名的なネット上には、誹謗・中傷、犯罪に関連した情報、性的な広告バナー、偏見・差別的発言など、攻撃的・不快な情報が多い。また、従来は目にする機会の少なかったこのような情報に対しても、常に万人がアクセス可能な状況にある。すなわち、攻撃的な情報・刺激への接触が、以前と比べ極めて日常的な事態として、なかば無意識的に経験されているのが現状であろう。さらにそうした情報・刺激への無意識的接触の影響は、本来ならば微小なものでも、日々の反復的な接触の中で累積され、人々の認知・行動に大きな影響を及ぼす(川上・吉田, 2011)。

これまで、情報への無意識的な接触による影響を捉えた研究は少なくない(Dijksterhuis & Nordgren, 2006; Wilson, 2005 など)。しかしながら、情報への接触という事態を現実に即して考えてみると、日常的な接触には、無意識的な接触だけでなく、当事者が注意を向ける意識的な接触とが混在していることは明らかであろう。つまり、環境内に存在する全ての情報が意識あるいは無意識のいずれかで処理されることはありえず、少なからず両者が関わり合いながら処理されると考えられる。しかし、先行研究においては、意識的な接触と無意識的な接触による影響が、異なる参加者間でそれぞれ個別に検討されてきた(Bornstein & D'Agostino, 1992 など)。したがって、意識的な接触と無意識的な接触の混在を踏まえた日常的な情報接触の影響を捉えるためには、個人内で両者が混在する形での直接的な検討が必要であろう。

2. 研究の目的

本計画では、意識と無意識という人間の持つ二つの処理システムがいかなる形で我々の社会的認知に影響を及ぼしているか、総合的に検討することを全体の目的とした。この目的の達成のため、

- (1)意識的な情報接触と無意識的な情報接触による影響の違いについての検討、
 - (2)それを踏まえた上での日常的な影響の検討、
 - (3)意識的な処理と無意識的な処理における処理特性の違いについての検討、
- の3ステップで一連の研究を実施した。

3. 研究の方法

(1)ステップ1: 研究の目的(1)の検討

のため、第一に、単純接触効果における閾上呈示と閾下呈示の強度の比較を行った。具体的には、同一実験参加者内で閾上と閾下で刺激を同時に呈示し(入力過程)、どちらの刺激入力の方が効果が大きいかを比較した。また、その効果測定(出力過程)には従来の自己報告による顕在指標と、GNATとIATという潜在指標を用いることで、多面的な測定を試みた。

さらに、実験2ではこの手法を発展させ、意識的な処理と無意識的な処理の関係を探るため、閾上と閾下で同一人物の矛盾した表情を呈示することによって、意識と無意識による情報が競合する状況を作り出した。

(2)ステップ2: 研究の目的(2)の検討のため、実験1では、日常的に接触する文字の形態的側面が説得的メッセージに及ぼす影響を検討した。具体的には、まず接触フェイズにて複数の手書き文字列を実験参加者へ呈示した。その後の評価フェイズでは、予備調査から中立的な内容として選定された2つのメッセージ(親近性高・親近性低メッセージ)を示し、そのメッセージへの納得度と賛否度を測定した。

さらに、実験2では、インターネットの掲示板など、匿名的な状況で散見される攻撃的な情報への接触の影響を、存在脅威喚起理論の観点から検討した。具体的には、死を連想させる単語を閾下呈示し、その影響を測定した。

(3)ステップ3: 研究の目的(3)の検討のため、実験1では、ある画像を閾下で反復呈示する前に、言語的教示によって画像に関する構えを形成するという手法を用い、単純接触効果の生起を検討した。

実験2では、形容詞と表情という言語情報と画像情報が矛盾するようペアを組み、閾上あるいは閾下で呈示し、人物の印象形成において、いずれの情報の影響が強く現れるかを検討した。

4. 研究成果

(1)ステップ1: 実験1において、刺激を閾上呈示した場合には、顕在指標と潜在指標の両方で単純接触効果が生じた。しかし、閾下呈示の場合には潜在指標のみの効果に留まった。加えて、両呈示の効果を比較したところ、顕在指標においては閾上呈示の方が効果が強いものの、潜在指標では両者に差はなかった。すなわち、無意識的な反応を測定する潜在指標については同程度、意識的な反応を測定する顕在指標については閾上での意識的な入力の方が強いことが明らかとなった。

さらに、実験2では、潜在指標では、閾下呈示された表情に基づいた印象が形成されたのに対して、顕在指標では閾上呈示された表情に則した印象が形成された。つまり、閾

上と闕下で入力される情報が競合する極端な状況においては、意識と無意識は比較的独立したシステムとして機能し、入力過程の意識性に応じた反応が出力過程で優先的に現れることが示唆された。結果のモデルを図1に示した。

これまで、意識的・無意識的な情報への接触による影響の検討はなされてきたものの、それらはいずれも異なる参加者間で個別に検討されたものであり、個人内で両情報がどのように処理されるかを明らかにしたものはない。その点で、本研究(ステップ1)から得られた知見は、意識的・無意識的な情報の個人内での関わり、統合過程の解明に貢献するものと考えられる。

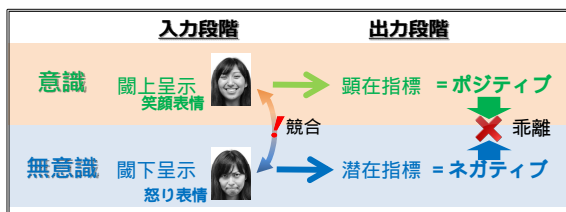


図1 意識と無意識の多層的処理モデルの概略

(2)ステップ2: 実験1において、親近性の高いメッセージに限って、評定の前に接触した筆跡と同じ筆跡で書かれた場合の方が、より説得的効果が強いことが明らかとなった。ただし、実験参加者は、メッセージがその前に接触した手書き文字と同じ筆跡であることに気づいておらず、この効果は無意識的なものであることが示された。すなわち、インターネットなどで日常的に接触する文字情報については、その形態的な側面の影響を無意識的に受けることが示唆される。

実験2の結果では、男性の実験参加者に限って、死関連語と自己関連語が結びついた場合、握力の増大という身体反応に影響が現れることが明らかとなった。結果を図2に示した。これは、存在脅威喚起理論に基づき、無意識的な死の顕現化が「男性は強くあるべきだ」とする社会的規範に沿った反応が現れたためと考えられる。すなわち、インターネット上などで、攻撃的な内容の情報に無意識的に接触することは、認知的な影響だけでなく、身体反応というより直接的な社会的影響を持つ可能性が示唆された。

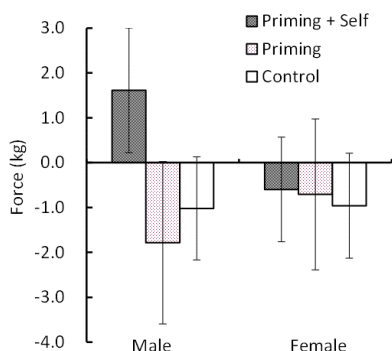


図2 ステップ2 実験2の結果

以上より、ステップ1において意識と無意識の多層的な認知過程が示唆されたが、ステップ2における検討は、この多層的な認知過程が、説得や握力の増大など、極めて身近な影響として出現する可能性を示唆したものと考えられる。

(3)ステップ3: 実験1では、実際に呈示する画像と言語的な教示が不一致の場合、潜在指標においては実際に呈示された刺激に基づく反応が現れる一方、顕在指標においては教示によって形成されたイメージに基づく反応が現れた。すなわち、意識はイメージに基づいた処理を担い、無意識はより現実に基づいた処理を担うことが示唆される。結果と手続きの概略を図3に示した。

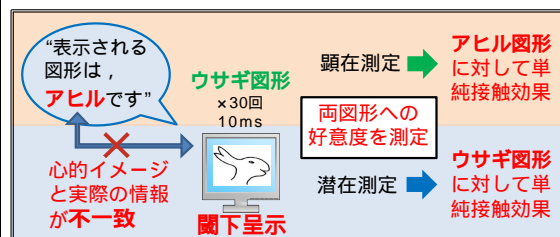


図3 ステップ3 実験1の手続きと結果の概略

加えて、実験2では、形容詞と表情という言葉情報と画像情報が矛盾するようペアを組み、闕上あるいは闕下で呈示したところ、闕上呈示された場合には言語情報に基づいた反応、闕下呈示された場合には画像情報に基づく反応が現れた。すなわち、意識は言語的な情報に、無意識は画像情報に鋭敏であることが示唆される。結果と手続きの概略を図4に示した。

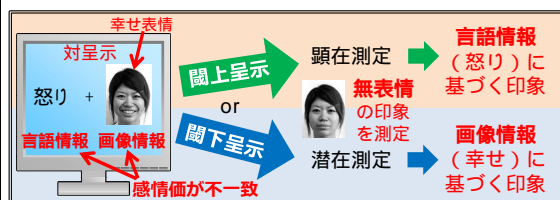


図4 ステップ3 実験2の手続きと結果の概略

得られた成果のインパクト

無意識に関わるこれまでの心理学的研究の多くは、従来意識が担うと考えられてきた心的活動が、実際には無意識に行われることを示すことで、意識の限界を明らかとしてきた(Hassin, 2013)。それに対して、本計画における一連の研究から得られた知見は、意識と無意識が、互いの機能や役割を補完し合いながら高度な社会的認知を成立させる、多層的処理過程としての適応的なモデルを示唆するものである。特に、人間の認知過程を入力と出力の2段階に分離した上で、それぞれの段階における意識性を想定するという枠組みは、近年の測定手法の進展を取り入れた独創的なものであった。この枠組みに基づき、入力段階での意識と無意識を競合させる

ことで、より純粋な形での意識的処理と無意識的処理の関係や、それぞれの処理特性を明らかとすることができた。

そして、この枠組みは、人間や意識を扱う多くの学問領域へ応用可能な柔軟さを有しており、他分野への波及効果も大いに期待される。加えて、本研究での意識と無意識の多層的処理過程は、「笑顔の裏に隠された怒り」、「頭では分かっているが、ついその行動やっってしまう」といった思考と行動のずれなどを示す現象の解明へも繋がる可能性を秘めており、より実践的・社会的なインパクトも有するものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

- (1) Kawakami, N., Miura, E., & Yoshida, F. (2015). Conscious and unconscious processes are sensitive to different types of information. *Evolution, Mind and Behaviour*, 13, 1-10. DOI: 10.1556/2050.2015.0001 査読有
- (2) Kawakami, N. & Miura, E. (2015). Image or real? Altering the mental imagery of subliminal stimuli differentiates explicit and implicit attitudes. *Imagination, Cognition and Personality*, 34, 259-269. DOI: 10.1177/0276236614568637 査読有
- (3) 川上直秋・菊地正・吉田富二雄(2014). 字のクセを好きになるか?: 筆跡に基づく単純接触効果の般化 *社会心理学研究* 29, 187-193. 査読有

[学会発表](計8件)

- (1) Kawakami, N., Miura, E., & Nagai, M. (2015). When you become a superman: Subliminal exposure to death-related stimuli enhances male physical force. The 27th Association for Psychological Science Annual Convention, New York (USA). 2015年05月21日~24日
- (2) Kawakami, N., Miura, E., & Yoshida, F. (2015). Conscious and unconscious processes are sensitive to different types of information. The 16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, Long Beach (USA). 2015年2月26日~28日
- (3) Kawakami, N. & Miura, E. (2014). Image or real? Implicit and explicit attitudes are sensitive to different sources of information. The 15th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology, Austin (USA). 2014

年2月13日~15日

- (4) 川上直秋・吉田富二雄(2013) 意識と無意識の処理特性 言語情報による閾下単純接触効果の修正 日本社会心理学会第54回大会, 沖縄国際大学(沖縄県宜野湾市) 2013年11月3日~4日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川上 直秋(Naoaki Kawakami)

愛知淑徳大学・特別研究員

研究者番号: 80633289